



新たな一歩へ向かって
第40回県立与論高等学校卒業式

第40回県立与論高等学校卒業式が3月1日行われ、41名の卒業生が想い出がいっぱい詰まった学び舎を後にしました。

ひとつの島、ひとつの町にあるひとつの高校で、学習やボランティアなど、様々な体験をしてきた生徒達に向け、校長先生は、「自分一人では生きていくことは出来ません。家族・親戚、仲間や先生方の支えがあったからこそ、今までよりよく生きてくる事が出来たことに感謝をし、これからの新しい生活を切り開いていってください。」と卒業生にエールを送りました。

卒業生のみなさん、それぞれに進む道は違っても、与論島での思い出を胸に、頑張ってください！



旭日単光章 西金澄さんが受章

西金澄さん(88歳)が、高齢者叙勲「旭日単光章」を受章され、伝達が行われました。

西さんは昭和59年から3期に渡り与論町議会議員に在職し、町政全般の振興発展に大きく貢献されました。

与論島の海を照らして40年
赤崎灯台のレンズ 海上保安庁より寄贈



赤崎灯台で、昭和46年から使用されてきたフレネルレンズが、奄美海上保安部から与論町に寄贈されました。レンズは、全体の高さ約86cm、重さは72kgにもなります。海を行き交う船と人々の安全を守り続けてきたこのレンズは、広く町民や観光客に、灯台の役割や歴史について知っていただく学習資料として、サザンクロスセンターに展示されています。

国の天然記念物

シマチスジノリが、麦屋井(キンジャゴ)で発見



国の天然記念物に指定され、環境省のレッドデータブックで絶滅危惧ⅠAに分類されている「シマチスジノリ」が、与論町西区の湧水井戸「麦屋井(キンジャゴ)」で自生していることが確認されました。

国内では沖縄での自生が確認されていましたが、それ以外では初めて。

麦屋井は、古来より神格高く羽衣伝説を残すなど著名な井戸で、地元住民により大切に管理されてきました。

自生地が減っている中で、従来の分布域外で確認されたことは、大変意義深い事です。

今後は、島の宝として、大切に見守っていきましよう。

あそびながら島の文化・習慣を学ぼう！
与論(ユンヌ)カルタ大会開催



島の方言や歴史などを題材にした、与論(ユンヌ)カルタを競い合う「与論カルタ大会」が2月13日砂美地来館で開催されました。

大会は遊びながら与論の自然、歴史、文化、習慣を知るとともに、島とユンヌフトウバ(与論方言)を愛する心を伝えることを目的に開催され、各子ども会から3名一組で出場し、予選リーグ戦、勝者によるトーナメント戦が行われました。

参加した子ども達は、真剣な表情で札を追い、枚数を競い合いました。

低学年の部では、「朝戸B」チーム、高学年の部では「わいたんでー」チームがみごと優勝を飾りました。

2月13日
砂美地来館にて

元氣な島の笑顔

国の登録有形民俗文化財
与論民俗村所有
与論島の生産・生活用具1094点が登録



与論民俗村 代表 菊 秀史 さん

島の観光名所としても有名な、東区にある与論民俗村が所有する生産・生活用具等、1094点が、登録有形民俗文化財に登録されました。

ここでは、与論民俗村代表を務める、菊秀史さんにお話を伺いました。

与論民俗村には、前身である与論民具館を開設した菊千代さんが昭和30年代後半から島内で収集してきた与論島の生活用具や、漁具、衣服・機織り道具などが数多く展示されています。

今回登録されたのは、与論島の生産と生活に係わる用具で、保存状態が良い1094点。

文化審議会は、「与論島の生産活動の実態や伝統的な生活文化を知る上で不可欠なもので、これまでに指定・登録のない奄美地方の生活文化を示す資料群であり、我が国の生活文化の地域差や変遷を理解する上で貴重である。」と評価しています。



代表を務める菊秀史さんに、今の民俗村のお仕事についてお話を伺うと、「私たちの仕事は、単に訪れた方を案内するだけではないと感じています。ここにある与論島の昔の暮らしを目にすることで、逆に自分たちの祖先がどのような暮らしをしていたのだろう？という気付きを与えていくことも、私たちの課題だと思っています。」

また、今回の登録については、「今回の登録有形民俗文化財の登録が、こういった伝承活動の大きな一歩になってくれることだと思います。」と話してくださいました。